

敬和学園大学と地域社会を結ぶコミュニケーション誌



KEIWA COLLEGE REPORT

第42号

April 2005

敬和カレッジ・レポート

発行/敬和学園大学広報委員会



第11回卒業式会場にて

CLOSE UP

「いま、リベラル・アーツ教育とは」 学長 新井 明

柴沼先生のお別れのメッセージ

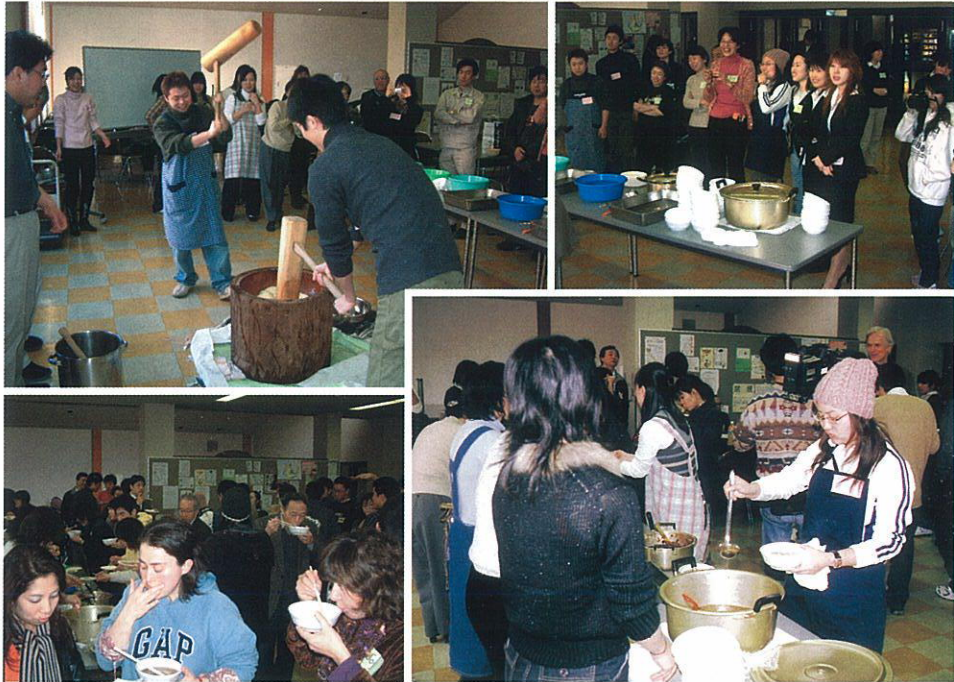
第11回卒業式のご報告/卒業生からのメッセージ

卒業論文発表会/学内合同企業説明会のご報告

2005年度 オープン・カレッジと科目等履修生のご案内

まちの駅「新発田プロジェクト」発表会のご報告

2005



1月19日に国際交流委員会主催の『留学生交流餅つき大会』が開催されました。「よいっしょー、よいっしょー」というかけ声の大合唱の中、参加した留学生や日本人学生、新発田中央高校ボランティア部の皆さん、一般市民の皆さん、そして教職員の総勢70名が交代で杵を振り上げ、餅つきを楽しみました。

中国や韓国でも餅つきはありますが、実際に杵を持つことははじめてという留学生たち。杵と杵がぶつかったり、臼のふちを叩いたり、大爆笑のうちにお餅がつき上がりました。できたお餅はすぐに丸めて、あんこやきな粉、雑煮と自分の好みに合わせて舌鼓。中には納豆を持参してきた教員（なんとアメリカ人！）もいて、食べてみるとこれもまた美味。食後は、クイズやゲームで盛り上がり、楽しい交流会となりました。

もくじ

CLOSE UP 「いま、リベラル・アーツ教育とは」 新井明 … 1	2005年度 オープン・カレッジのご案内 … 10
柴沼晶子先生 退職のご挨拶 …… 4	森洋子先生 講座のご報告 …… 10
柴沼先生を送ることはば …… 5	2005年度 科目等履修生・研究生のご案内 … 11
第11回卒業式・卒業謝恩会のご報告 …… 6	寄付者ご芳名 …… 11
卒業生からのメッセージ …… 7	まちの駅「新発田プロジェクト」発表会のご報告 … 12
英語英米文学科 卒業論文発表会 …… 8	学事予告 …… 12
卒業生は今 遠山 結貴 …… 8	キャンパス日誌 …… 13
学内合同企業説明会のご報告 …… 9	

いま、リベラル・アーツ教育とは

学長 新井 明



入学式にて（新井学長）

とか情緒とかが、全くわからなくなったならば、またそのようなものはわざわざ読み解くことはない、というような風潮が支配するようになったなら、「現代」は即「闇」と化すことは明白なのだ。生きる人間の価値を無視しても、この世での効率を万事優先させようという主張が、その背後にうめいているからである。

●戦中教育、そして戦後教育の誤解

かつてこの国は、大きな戦争をいくつも戦った。欧米諸国に比べて近代化に後れをとったこの国が、開国後、一日でも早く先進諸国と肩を並べることができるようになるには、まず軍事大国となり、近隣諸国を植民地化し、国内生産力を高め、東洋の雄としての地位を確立することが第一である。この島国の政治指導者層は考えた。この日本中心主義を確立するという目的のためならば、(他国を含めての)人間とその文化の犠牲などは、第二、第三の問題として、脇に押しやった。その歩み方は徹底して、みごとと言うほかなかった。小学校はなくなり、それにかわり、天皇のための「小国民」を育成する国民学校ができ、「教育勅語」を暗唱させた。『万葉集』を教えても、「防人の歌」が中心であった。そ

の「小国民」の理想的人間像は天皇を守る「醜の御桶」となることであった。青少年を国策貫徹の線に立って教育した。そして迎えたのが一九四五年の敗戦であった。

もう十年以上も前のことになる。かつて日本私立大学連盟の学生部会の仕事として、「現代学生部論」（一九八九年）、また『新・奨学制度論——日本の大学教育の発展のために——』（一九九一年）などの編集・執筆に携わったことがあった。その過程で、太平洋戦争敗戦直後、第一次米国教育使節団が日本の教育関係者たちに残した報告書を綿密に読んだ。

報告書は、「大学は第一に、知的自由の伝統」に立つべきであって、「職業的及び技術的教案」以前に、「普通教育科目を自由に取り入れるべきである」と述べ、大学は若き人格の個性が自由に成長してゆくの助ける、いわば「助育」の場であると規定した。いまから見ると、日本語として熟していない表現ではあるが、ここで言っているのは、「普通教育」「自由高等教育」、つまり個人の知的・人格的發展を目指すリベラル・アーツ教育の勧告であった(戦後の「教育基本法」は、この勧告の精神を生かした、いわば教育憲法であった)。

日本の教育界はその後、この勧告の真意を理解することはなかった。あるいは、理解することを避けた。そして、一般教育課程(前半二年)+専門課程(後半二年)という形の大学教育の勧告としてこれを受け取り、その後の新制大学の制度上の基盤を固めた。その結果、一般教育課程は専門課

●大学激動の時代

いま大学は、激動の時代を迎えている。以前から言われてきたことではあったが、いよいよその時代に入った、の思いが深い。その逆風を、最もきつく受けているのは、学部で言えば文学部であろう。この五年間で一割以上の減少をたどり、現在は九〇学部台であるという。この傾向はさらに急速に進むことであろう。東京都立大学の改組は、その象徴的事件であると言える。

大学の学長クラスの人士の中でさえ、例えば文芸作品を教室でゆつくりと味わうなどの作業は、現代の大学での教育ではない、と明言する方々がいる。そうだろうか。古典に属する作品に溜まっている人間の知恵

程の前段階、あるいは一段と低い教育課程だと理解され、「パンキョウ」などと蔑視されるような事態を引き起こした。「専門」にしか目の届かないような型の人間類型をつくりあげてしまつては、それから先の社会は専門バカの支配する社会になる。

いまの日本はその典型である。業界でも、官界でも、政界でも、己の特殊分野にのみ徹していて、そのほかに目を向けることはせず、他人が己の世界に口をさしはさむことは許さない。己の世界が全世界であつて、その世界にはそれぞれの君主がいる。ドンがいる。これでは、各組織の中にしか生きることのできない者たちは、いわば奴隸的な生き方を強要される。各組織では、そのしでかした悪やウソは、徹底的に覆い隠そうとする。組織のためならば、いかなる虚偽も許されると思われている。組織のためならば「個」がつぶされていつてかまわない。



聖籠町立蓮野小学校での英語ボランティア

いま求められているのは、この閉塞的社
会体制を内から突き破るほどの力を蓄えた
人材である。それこそ、真の意味での「即
戦力」として役立つ「人材」であるはずで
ある。そして、この「人材」の育成こそは
(時間のかかることではあるが)、リベラ
ル・アーツの教育、つまり「普通高等教育」
の仕事なのである。ただ問題は、この教育
は国立大学では、たとえそれが法人化され
たからといつても、急には無理であらう。
敗戦後の米国教育使節団の勧告を真摯に受
け取つて、教育の現場に生かす努力をこの
国は、戦後六〇年にわたつて実践してこな
かつた。そのつけは、いまに至つて生きて
いる。

●リベラル・アーツが育てるもの

筆者は長く英文学科の教授を務めてき
た。卒業生の中からは当然ながら、英語・
英文学の専門家が出、英語教育や、英語を
使う業種で生きてきた人物が出た。しかし、
それが大半なのではない。おもしろいこと
に、卒業時には、学生たち自身でさえ、ま
さか将来自分がそのような業種に携わるこ
とになるとは想像だにしなかつた方面で活
躍している者が多々いる。

銀行業務に入った女性が、その銀行の研
究部門に籍を置き、最近では『失われる子育
ての時間』(勁草書房) などという本を出
した。その「あとがき」の中で、「大学時
代の恩師である新井明先生には、文学部の
人間として、経済学などの議論では取り上
げられない問題に目をむけることの大切さ



学生と教職員によるクラス対抗綱引き大会

を教えていただいた」と記している。また
別の卒業生で、はじめは東京の外国系銀行
にいたのだが、九州・湯布院にほれ込み、
いまはそこに住み、その土地の発展のため
に尽くしている人物がいる。最近、町会議
員に推されてしまったと書いてきた。華
道・小原流の師範となり、その方面で活躍
している者もある。ロシア文化に興味をも
ち、一時モスクワにいたが、いまは日本で
その紹介に生涯をかけている者もある。税
理士を始めた者もある。沖繩の民謡に深入
りして、いまでは沖繩に住み、島唄の歌い
手となった女性もいる。また、極真流空手
道場を開いて子どもたちの育成に励んでい
る婦人もいる。

これら旧学生たちに共通していることが
一つある。それは、文学部の学生時代に英
文学上の作品「詩とか小説とか」を、
ゆつくりと一年をかけて読み、味わい、そ

の結果をペーパーに仕立てて、学窓を巢立った者たちだということである。人文学的雰囲気のみならず、人間の喜びや悲しみを、言葉を通して味わい取り、感動し、人間の尊さを知った、学んだ、という若き日の人生体験が、彼らのその後の歩みに豊かさを与えたのだ、というほかはない。この若者たちは、英文学の勉強を通して、いわゆるリベラル・アーツの教育の美点を身につけたと言っている（ここで、誤解のないように付け加えるのだが、リベラル・アーツ教育は、なにも人文学に限られるものではない。それは人文・社会・自然の各分野を超えた教育の基本理念・基本姿勢なのだ。筆者は人文学なので、たまたまその具体例を知っているにすぎない）。

●敬和学園大学が目指すところ

『暮しの手帖』という雑誌がある。その表紙裏に一編の詩が載っている。

「すぐには役に立たないように見えても／やがて　こころの底ふかく沈んで／いつか　あなたの暮し方を変えてしまう／そんなふうな／これは　あなたの暮しの手帖です」

大学教育のことを考える際にも、多くの示唆を与えてくれる詩文である。新奇な、便利な、効率のいい、もの珍しく、てかてかしたものの——そのようなモノ、また人間が、本当の人間の生活に幸せを送り込むものであろうか。「こころの底ふかく沈んで」、しかしその出番を待つ分厚い「教養」が、やがてわれわれの「暮し方を変える」こと

になるのではないか。それは、「パンキョウ」とは異なるものだ。

リベラル・アーツ教育の目指す教養主義教育・全人教育は、しかし、日本の大学のすべてにおいて行われているものではない。それは主に、キリスト教主義を掲げる私立大学の仕事となっている。多くのキリスト教主義の私立大学は、経営難の現実にも屈せず、建学の精神——その基本は「神に仕え、人に仕える」の精神——を掲げて、その達成に使命を抱きつつ歩みゆく。彼らは真の教育とは何か、という課題をめぐっては、旗幟（あるいは、反旗）鮮明、迷うところはない。歩みゆくその姿は、この国の教育の荒野にひと筋の道を残している。



クリスマス燭火礼拝

敬和学園大学の学び

「敬和学園大学は、キリスト教精神に基づく自由かつ敬虔な学風の中でリベラル・アーツ教育を行い、グローバルな視点で考え、対話とコミュニケーションとボランティア精神を重んじて、隣人に仕える国際的教養人を育成します。」

これは私達が「ミッション・ステートメント」とよんでいる、本学の建学の理念をより具体的に表現したもので、学生・教職員の全てが共有する、いわば「敬和スピリット」です。

このような方針のもとで、人間らしい心を備えた人間になる教育をすること、それこそが本学のめざすものです。

知育（頭の教育）、徳育（心の教育）、そして体育。この三つを教育の根底に置き、様々な学問を幅広く学ぶことで、国際的な視野を広げ、人類の培ってきた知恵を深く学び、人間に授かった人間の個人の尊厳を育成します。

学生一人一人が、人格を磨き、そして精神的に自立し、自由な発想を持って考え、行動していく。大学はそのための出会いの場であり、真理の探究を進める場所です。

本稿は『大学時報』二九九号（二〇〇四年十一月）所載の文章であるが、日本私立大学連盟の許可を得て、ここに再録する。

お別れの ことば

未来への希望の光

前英語文化コミュニケーション学科教授
柴沼晶子



お別れにあたって、一九九三年の四月に敬和学園大学に就任してから、多くの温かい友情と善意に囲まれ、心豊かに学生の皆さんに向き合うことができたことへのお礼を申し上げます。また地域の学校の先生方にも本学学生の教育実習などを通して有益な指導をいただいたことのお礼をこの場をお借りして申し上げます。

三月十九日には、初めて教職課程の同窓会が開かれ、中学校・高等学校の英語の教員免許状を手にして巣立っていった多くの卒業生にお会いすることができました。あらためてその活躍する頼もしい姿に接する機会を与えられることに心躍る思いです。

教師への夢を持って卒業後も研鑽につとめ、初志を貫徹した方々や、他の職場や家庭にある方々も充実した有意義な日々を重ねてこられたことでしょう。昨秋の地震の折には災害地方面に就職した方たちのことを思い心が痛みました。でも困難に立ち向かうほど敬和スピリットで培った力を発揮されたのではないのでしょうか。

現在、物が溢れる日本の社会で、希望だけが足りないといわれますが、希望の光を掲げ続けている敬和学園大学の光を受け継い

で、卒業生の皆さんが社会を明るく照らし、未来への希望を語ってくださいることを期待しております。

新発田は私にとっては全くの未知の地でしたが、いくつかの縁があることを後に知りました。前任校の創立者宣教師ミス・キダーが一三〇年前に新潟の海岸に蒔いた月見草の種が毎年本学の校庭に花を咲かせていることや、「狭い世の中」を実感した思いがけない出会いや巡り会いもありました。

世界はますます小さくなっています。国際感覚を磨かれた卒業生が次々と世界に向けて飛び立っていくことを祈念いたします。



第1回 教職課程同窓会にて

心と心の指導

一九九七年度卒業 小沼 善敬

(北海道砂川市立砂川中学校勤務)

柴沼先生と私が初めて出会ったのは、今から九年前です。そのときの第一印象は、「この先生はなんて上品な方なのだろうか」というものでした。言葉遣いとしぐさからかもし出される雰囲気は心地よく、柴沼先生と話をしていると心が澄んでいく気がしました。

さて、本題の柴沼先生との思い出ですが、私の場合は先生の授業です。「教育本質目標論」で行った新学力観や夫婦別姓についての白熱した議論の様子は、今も鮮明に記憶に残っています。「英米文学講読」の授業では、毎時間英単語の試験を実施して学生を鍛えつつ、絶妙な語り口で講義をすすめられ、私たちを異国の世界へと誘ってくれました。

また、夏休みに行った教職課程の妙高原宿泊研修も忘れることができません。先生も交えて、キャンプ場で一緒に夕食をつくり、ちぎり絵を作成し、教育について語りあうことで、まさに心と心の指導をしていただきました。

柴沼先生が退職されたとき聞き、懐かしさとともに感謝の気持ちがかみ上げてきました。先生が敬和の学生たちに残してくれたものは、これからも引き継がれていくことでしょう。これからも存分のご活躍をお祈り申し上げます。

送ることば

りっぱな木を育てること 教職課程委員長 益谷 真

私も柴沼先生と同時期に敬和学園大学へ赴任し、早いもので足かけ十二年が経ちました。この間の教職課程の歩みについては、柴沼先生が敬和学園大学人文社会科学研究所年報N.O. 2に詳しくまとめられておりますので、ここでは教職課程の担当者として一緒にさせていただきながら、実のところは教職課程教育に関する先生の教え子であったと思う立場から、先生の新しい旅立ちを祈念させていただきたいと思えます。

先生はこれまで、木や草花を学園のあちこちに寄贈され、学生たちにもそのように接してこられてきました。私もそのような木や草花をりっぱに育てようとして努力してまいりました。初めのころは手加減が上手くできずに、反発を招いてあらぬ方向へ



お別れに柴沼先生が植えられたモクレン

向かわせてしまったり、時には不本意にも枯らしてしまうようなこともあったと反省しきりです。先生のように上手にりっぱな木を育てるには、後一〇年、二〇年とかかかってしまうかもしれませんが、今後も長い目で見守っていたければ幸いです。

二〇〇五年度からはこれまでの英語に加えて、新たに国際文化学科でも高等学校の公民科の教職課程もスタートします。これからは柴沼先生から学ばせていただいた教職課程の運営方針を活かし、学生を長い目でみて成長への助けになる方向で教職課程教育を広げていけるように、微力ですが鋭意努力してまいりたいと存じます。

三月十九日の教職課程同窓会では、カレツジソングに代えて教職課程の卒業を祝う気持ちで森山直太郎さんの「さくら」を合唱しました。その一節をご紹介します。柴沼先生への感謝の言葉とさせていただきます。

： 僕はきつと待っている
君とまた会える日々を

さくら並木の道の上で
手を振り叫ぶよ

どんなに苦しい時も

君は笑っているから
挫けそうになりかけても

頑張れる気がしたよ

： 今なら言えるだろうか
偽りのない言葉

輝ける君の未来を願う

本当の言葉

さらば友よ またこの場所でお会い

さくら舞い散る道の上で

柴沼先生、お元気で！

一九九八年度卒業 渡邊 千早 (旧姓品田)

(新潟県立村上高等学校勤務)

柴沼先生のご退職をお聞きし、まず思ったことは「えっ、まだ辞めるのは早いですよ。」それからしばらくして「いやー、本当に教職やゼミでお世話になったなあ。」私は、敬和学園大学に一九九七年四月から一九九九年三月までの二年間通いました。そして、同九九年四月より新潟県の高松校教師として、英語を教えています。

卒業後も、柴沼先生とは音信不通になっただけではありません。例えば、私が英語教育に関するセミナーに参加すると、必ずと言っていいほど柴沼先生のお姿をお見かけしました。大勢の参加者の中にあっても、私には柴沼先生の存在がすぐにわかりました。なぜなら柴沼先生は、外見は小柄で華奢でいらつしやいますが、内面から醸し出される品格と英語教育への情熱で「ピカイチ」であるからです。そういつた機会には、わずかな時間でしたがお話すことができ、とてもうれしく思いました。

また暑中見舞いや年賀状を差し上げると、必ず励ましのメッセージを添えたお返事をくださいました。何といっても一番の思い出は、神奈川県江の島の島でゼミ合宿を行い、その時に先生のご自宅に招いていただいたことです。

すべてが昨日のことのようです。柴沼先生、今まで本当にありがとうございました。これからもお元気で。

卒業式

第十一回 卒業式と卒業謝恩会のご報告

敬和学園大学第十一回卒業式が、去る三月十八日（金）聖籠町市民会館で行われ、一四一名の若人が希望に胸を膨らませて社会に巣立って行きました。

オルガンの前奏が鳴り響いたあと、厳粛な赴きの中で卒業式がはじまりました。聖書の朗読とお祈りが捧げられたのち、新井学長から卒業生一人ひとりに「卒業証書・学位記」が手渡され、すべての卒業生と握手が交わされました。学長からは、これから社会に巣立つ卒業生諸君に、「リベラル・アーツ主義を学んだあなた方を誇りに思つて社会に送り出します。人生全体をボランティア精神に立つて生きて行つていただきたい。」との祝辞が贈られました。

卒業の喜びと感謝の気持ちを込めた卒業生・在学生有志・地元のコラスグループ



卒業証書・学位記授与

によるハレルヤ・コーラスや来賓の皆さまからのご祝辞、多くの祝電が披露され、卒業生へのはなむけとなりました。

それに応えるように、卒業生代表の松永献さんが「これから困難に直面した時も、敬和学園大学での経験を活かし、広い視野と知識を発揮し、隣人を愛し隣人に奉仕する、豊かな人間性をもった人間として歩んでいきます」と力強く答辞を述べました。

今年度は、成績最優秀者として廣澤卓郎さんと松永献さん、卒業表彰者として渡邊佳寿美さんが表彰され、それぞれ副賞が贈られました。そして卒業生を代表し、松澤貴祥さん（卒業準備委員長）から大学に卒業記念樹のユリノキが贈呈されました。

また、今年度で本学を去られた柴沼晶子教授には名誉教授が授与されました。柴沼先生は一九九三年に着任以来、本学の教職課程の礎を築かれ、これまでに五〇名以上の卒業生が教員として巣立っています。その功績への感謝の意をこのような形で表現でき、本学は誠に光栄に存しております。

卒業式の後、新潟市内のホテルに会場を移して「卒業謝恩会二〇〇四」が行われました。これは卒業生からこれまでお世話になった保護者の方々並びに大学教職員への感謝の気持ちを表すもので、後援会のご協力を得て実施しているものです。卒業生たちは恩師らを囲んで楽しかった大学生活を思い起こし、時間を忘れるほど会話がはずむ会となりました。

卒業準備委員会より



卒業準備委員会は、昨年一〇月に小林和美さん、中澤佳菜子さん、近可奈子さん、松澤貴祥さん、神田篤志さん、佐藤理絵さん、山田真実さんの七人で活動を始めました。活動は、卒業アルバム作成と卒業謝恩会の企画・実施が中心でした。

アルバムは個人写真とゼミ写真、四年間の学生生活、ゼミや行事、クラブ写真など様々な写真を集め、掲載する枚数を考えながら見やすいレイアウトで作りました。

卒業謝恩会では、事前に出席していただく来賓や保護者の方々、大学の教職員の方と卒業生の人数を把握し準備を進めるとともに、当日の司会進行を務めました。初めてのことで緊張しましたが、教職員の方々や後援会、同窓会のご支援、ご協力により盛会のうちに無事終了することができました。ご協力いただいたすべての皆さまに心より感謝申し上げます。（卒業準備委員会）

卒業生より

外の世界へ



英語英米文学科卒業
廣澤 卓郎

私にとって敬和学園大学は「世界」への窓口であり、また自分探しの「旅」の出発点でした。

幸運にも私は在学中に約一年間アメリカへ留学することができました。現地では見るもの全てに驚き、感心し、また言葉の不自由さのために何度も怒り、泣いたことを覚えていています。このような生活を通じて、面白い話ですが、少しずつ日本の文化に興味を持ち始めました。私はそれまで「日本文化とは何か」と考えもしませんでした。自分なりにアメリカ文化と比較をするうちに、今まで気が付かなかった日本の独特な部分を認識し、自分が日本人であると再認識する結果となりました。

この自己認識は数々の授業を通して可能でした。例えば十九世紀イギリスの作家 Jane Austen の作品を読む時、その登場人物の詳細な心理描写のおかげで「人間とはどういうものか」という命題を探索できます。その時に私の中で「自分とはどういう人間か」という疑問が湧いてきました。このようにアメリカ文化や文学作品は自分の「外の世界」を映しますが、それを通して自分の内にあるものを認識、または再認識できるように思います。

私はこれらの「旅」を通して人間的に大きく成長できたように思います。最後に、先生方と職員の方々に深く感謝します。

充実した二年間



国際化学科卒業
矢部 紗綾香

私は専門学校を卒業した後、敬和学園大学の三年次に編入したので、敬和では二年間を過ごすこととなりました。

大学生活の中では特にゼミが印象に残っています。私はジョイ先生と前嶋先生の二つのゼミを取っていたのですが、ジョイ先生のゼミではフィリピンやスリランカ出身の方々とも交流することができましたし、ジョイ先生の自宅で開かれるゼミパーティーでは先生が毎回手料理を作ってください、それがとても美味しく楽しい時間を過ごせました。前嶋先生のゼミも毎回勉強になる有意義なもので、時間が過ぎるのがとても早く、もっと時間が欲しいくらいでした。また四年間を通じて留学生と友達になれたことはとても大きなことでした。留学生から学ぶことはたくさんあり、今まであまり気付かなかったことまでも考えることができました。

大学生活を振り返ってみると二年間は本当にあっという間に過ぎてしまったように感じます。よい先生、友人に恵まれてとても充実した生活を送ることができたからだと思います。みんなに感謝しています。

敬和学園大学を卒業し、みんなそれぞれ道を歩んでいくことになりましたが、卒業してからも「keep in touch」できたらいいなと思います。二年間ありがとうございました。

謝辞大家



英語英米文学科卒業
李 蕾

子供の時から日本に興味があり、中国で日本語を勉強し始め、「百聞は一見にしかず」と考えて日本にきました。夢が叶って来たまではよかったです。思ったよりも勉強とアルバイトの両立が大変で、いつまで続けられるかすごく不安でした。そんな気持ちで敬和学園大学に入ったことを思い出せばこうして卒業できることがなんて幸せなのだろうとしみじみ感じます。それは多くの幸運があったおかげなのです。

一つ目は好きな勉強に出会えたことです。ゼミで読んだ『ライ麦畑で捕まえて』で文学の学問的な楽しみ方を知りました。また劇を観に行つて、みんなで感想を言い合ったのも楽しい思い出です。

次に、二年の時に特待生制度ができ、特待生になれたことです。そのおかげでアルバイトを減らし、様々な経験をすることができました。特にサークルで世界の料理をつくった経験は一生の宝物です。

最後に、日本で就職することができたことです。進学も考えていましたが、最終的に大学の近くの会社でがんばることにしました。日中の架け橋になることができる仕事なのでやりがいを感じています。

こうした幸運に恵まれたのも諸先生方、職員の方々、大学の友達のおかげだと思います。そうしたすべての人に心から感謝を申し上げます。謝辞大家。

卒論発表会

二〇〇四年度 英語英米文学科 卒業論文発表会

英語英米文学科恒例の卒業論文発表会が去る二月四日に開催されました。毎年この時期に行われており、卒論を指導したゼミの教員の推薦によって選ばれた四年生数人がそれぞれの努力の成果を発表する晴れの場となっています。ゼミの同級生や友人、教員はもちろんのこと、これから卒論に挑戦する三年生も参加します。

教員にとつては、学問上の興味もさることながら、それぞれの学生の四年間の成長を目の当たりにすることができるので、毎年本当に楽しみな行事となっています。北垣前学長もそうでしたが新井学長もこの催しに欠かさず出席してください。

ここ数年参加者が増える傾向にあり、終了後にお茶とお菓子をいただきますながら、学生と教員がアカデミックな話題を中心に、



4年間の集大成

<2004年度 英語英米文学科 卒業論文発表者>

発表者	論文タイトル(指導教員)
中川 千寛	<i>Pride and Prejudice</i> に於ける結婚とヒロインの精神的成長(杉村)
今田 豊	<i>Heart of Darkness</i> における「闇」: 西欧文明と「原始」の対立(杉村)
安達 高介	二つの映画から見るベトナム戦争とアメリカのアイデンティティ: 敗戦の記憶(松崎)
矢部 紗綾香	アジア系アメリカ人(前嶋)
金井 清子	子どもの言葉の獲得過程とその問題点(前嶋)
荒井 洋一	複合語における解釈の問題についての考察(五十嵐)
天木 美佳	「寡黙」と異文化コミュニケーション(中村)
和田 寛子	ケルトの浦島物語『常若のアシーン』(神田・金山)

親しく交われるよい機会となっています。五十嵐海理先生の司会のもと、今年も八人の四年生が一人二〇分という制約の中、レジュメや資料を駆使し、力のこもった発表を行いました。それぞれの発表後の質疑応答では、教員、同級生からの質問や活発な意見交換がなされ、充実した発表会となりました。

今年度の発表テーマは例年以上にバラエティに富み、中には英語英米文学科のゼミ担当教員と国際文化学科の教員の二人の連携指導で学際的な卒論を書いた学生もいて、今後の卒業研究のさらなる可能性が見えるようです。(英語英米文学科 松崎)

早いもので敬和学園大学を卒業してこの春で一〇年が経ちます。私は今、新潟市の結婚式場でブライダルプロデューサーとして勤めています。どんな式場なのか簡単に紹介しますと、二〇〇一年六月に新潟市の鳥屋野潟近くにオープンし、一戸建ての教会と洋風のガーデン付きの一軒家を貸し切つてアットホームなウエディングパーティーを楽しんでいただけるところです。そんな普段の生活とは違う、特別な一日を迎えるために日々新郎新婦様と一緒にプランニングし、夢をかたちにしております。私がブライダルに興味をもち、この道を選んだのは単純な理由でした。大学を卒業後、サービス業に関心があった私は、当時



自分がよいと感じるものを自信を持ってプロデュース

卒業生は今

私の道

一九九五年度卒業

遠山 結貴

(リージェンス・ウエディングマナーハウス勤務)

就 職

学内合同企業説明会のご報告

去る二月十八日(金)、三年次生を対象とした「学内合同企業説明会」を開催しました。厳しい採用状況の中、四十九社の企業・官公庁から多数の採用ご担当の方々にご出席いただきました。参加した八十一名の学生は、それぞれ興味を持った企業等のブースを訪問し、求める人材像や今後の採用試験の日程等についてメモを取りながら熱心に聴き入りました。

また、三名の本学卒業生が採用担当者として「里帰り」し、自社の説明をしながらも、就職活動の「先輩」として後輩たちにアドヴァイスする姿には頼もしさを感じました。お忙しい中、ご出席いただいた採用担当者の方々には、改めてお礼申し上げます。(就職委員長 福玉)



リラックスして自分をアピール

学内合同企業説明会に参加して

国際文化学科四年 須藤 幸恵

私にとって今回の学内合同企業説明会は就職活動を始めて七回目の合同説明会でした。学外の合同説明会は他大学の学生も参加するため、多くの学生で混雑しています。このため、興味のある企業があっても説明を十分に聴けないことがありました。今回は学内で行われたので、緊張することもなく、充分説明を受けるとともに自分をPRすることができました。学外の合同説明会と比べて、じっくりとお話を伺うことができたとでもよかったです。

私が訪問した社数は四社と予定より少なめでしたが、一社当たりの内容が濃い説明会で満足しています。さまざまな業種や職種のお話を聴くことで、新たに興味を持った企業もありました。中でも、あるサービスマン(冠婚葬祭)の人事の方が「サービスマンのやりがい」についてお話しされていたことが、とても勉強になり、強く印象に残っています。

これまでの就職活動を振り返ってみると、自発的に動かなかつたために何事も前に進まずに時間だけが過ぎ、焦りばかりを感じていました。今も不安でいっぱいですが、後悔のない就職活動をするために、自分自身を甘やかさずに積極的に動いて、厳しい就職戦線を勝ち抜きたいと思っています。

ホテルでフロントマンとして働いていました。そこでも結婚式を行っていたのですが、いわゆる「ありきたりの結婚式」でした。決まり切った内容で淡々と進んでゆくものだと思っていました。それは決して悪くはないが、決してよくもない…。しかし、仕事として多くの結婚式に触れることにより、いつしか欲が出てきたのでしょうか。心のどこかで自分が結婚式を挙げるのなら、ここでは自分の思い描いた結婚式はできない。だったら自分が思い描いた結婚式ができる場所で仕事をした。そんな思いが込み上げていた時に、私は運よく現在の職場に出会うことができました。「これが自分の求めている結婚式だ」と。そしてさらに運よく仕事として就くことができました。本当に単純なことですが「自分がよいと感じるものは、他の人にも自信を持ってお薦めできる」と思います。そんな気持ちを持って働ける職場に感謝しております。

そして今、私はプライダルプロデューサーとして日々、人生の中で大切な一日を創り続けています。そのために新郎新婦様と何度も何度も打合せをします。結婚式というプレッシャーに押し潰されそうになる時もあります。でも、それを乗り越えて、当日お二人の笑顔を見ることができ喜びは本当にプロデューサー冥利に尽きます。式後、「この式場でよかった、遠山さんでよかった。」そんなお言葉をいただけるから疲れも吹っ飛びます。「当日も楽しかったけど、打合せも楽しかった!」そんなお言葉が私にとって最高の栄養ドリンクです。

オープン カレッジ

〈2005年度 オープン・カレッジ〉

敬和学園大学 「阿賀の流れに ―新潟水俣病への40年の思いを語る―		
6月18日(土)	大学でビデオを見ながらの講義	坂東 克彦 弁護士
6月19日(日)	現地を訪ね、考えるバスツアー	坂東 弁護士による解説
※お問合せ 敬和学園大学総務課 (Tel 0254-26-2394、e-mail kcop@keiwa-c.ac.jp)		

敬和学園大学 「いまに生きる昔話 ―グリム・メルヒェンの世界を楽しむ―		
10月1日(土)	いまに生きる昔話 (その1)	真壁 伍郎 新潟大学名誉教授
10月15日(土)	いまに生きる昔話 (その2)	真壁 伍郎 新潟大学名誉教授
10月22日(土)	いまに生きる昔話 (その3)	真壁 伍郎 新潟大学名誉教授
※お問合せ 敬和学園大学総務課 (Tel 0254-26-2394、e-mail kcop@keiwa-c.ac.jp)		

新潟市 「民族、宗教、国家を超えて―共存する社会、共生する社会― (新潟市生涯学習センター)		
6月16日(木)	文学から見た西欧と日本	新井 明 学長
6月23日(木)	共存・共生をおびやかすもの	佐々木 寛 新潟国際情報大学助教授
6月30日(木)	市民社会の形成はいかにして可能か	矢嶋 直規 助教授
7月7日(木)	ポスト京都議定書をどう生かす	房 文慧 助教授
7月14日(木)	日本における外国人の受け入れについて	福王 守 助教授
7月21日(木)	イラクとアメリカ	大野元裕 財団法人中東調査会 首席研究員
※お問合せ 敬和学園大学総務課 (Tel 0254-26-2394、e-mail kcop@keiwa-c.ac.jp)		

聖籠町 「いのち、ひと、生活」 (聖籠町町民会館)		
10月4日(火)	心の動きとコミュニケーション	益谷 真 教授
10月18日(火)	文学に見る作家の郷土性と生き方	若月 忠信 教授
10月25日(火)	高齢者社会がおしえてくれたもの	山崎 ハコネ 講師
11月1日(火)	福祉の人間観―いのち・ひと・生活―	青山 良子 助教授
※お問合せ 聖籠町公民館 (Tel 0254-27-2121)		

新潟市豊栄地区 「ことば、社会、コミュニケーション」 (新潟市豊栄地区公民館)		
6月8日(水)	ことば遊びとコミュニケーション	上野 恵美子 教授
6月15日(水)	日本語から英語を学ぼう	安藤 司文 教授
6月22日(水)	教育とコミュニケーション	伊藤 敦美 講師
6月29日(水)	旅＝コミュニケーション	佐藤 涉 教授
7月6日(水)	比喩とことわざの言語学	五十嵐 海理 講師
7月13日(水)	魂のコミュニケーション	山田 耕太 教授
※お問合せ 新潟市豊栄地区公民館 (Tel 025-387-2014)		

地域とともに 二〇〇五年度オープン・カレッジのご案内

今年も、本学会場をはじめ、日ごろお世話になっている地元の新発田市や聖籠町、そして新潟市豊栄地区を会場にオープン・カレッジを開催いたします。例年、参加者の皆さまから、活発なご意見・ご質問をいただき、大学や地域の皆さま同士との和気あいあいとした交流の場となっております。

今年も、新潟水俣病の四〇年を振り返るバスツアー付きの講座や、今年で三回目のシリーズとなる子供の教育を考える昔話の講座など、各会場ごとに特色のあるテーマを設けました。それぞれの日程やお問合せ先は次のとおりです。皆さまのご参加をお待ちしております。

(広報委員会)

美術史の醍醐味を満喫

「西洋絵画史における子ども像」をテーマに、西洋美術史を専門としブリュッセル研究の第一人者として世界的に有名な森洋子先生(明治大学教授)を講師にお迎えして、去る十二月と一月の二回の週末に本学オープン・カレッジが開催されました。

中世絵画ではこれまで美術史においてあまり注目されなかった当時の大人たちの子ども観の分析を、ルネッサンス絵画では集団での子ども遊びを描いたプリューゲルの作品を中心に子ども遊戯論を、十七世紀オランダ絵画からは子ども・母親・家庭という図像表現の背後にある「教訓と寓意」の解説を、さらに十八世紀イギリス絵画における社会派画家の「虐げられた子どもたち」、また同時代のスペイン・フランス絵画に見られる子どもたちの「自然な姿」を語っていただきました。

受講生は、先生の持参された何百枚もの貴重なスライドに目を凝らし、先生の発見に驚き、解説に納得し、研究への熱意に感銘を受け、時間の経つのも忘れる至福の週末を過ごしました。講演終了後、森先生から次のようなコメントをいただきました。

「四日間の講義、わたしとしては全力投球という感じでした。(中略) 今回の講義はわたしにとって一生の思い出になります。最後にゴヤの話をしたとき、とても充実感を覚え、自分と受講生の皆さまとが一体になった高揚を覚えました。まさに音楽でのフィナーレという感じです。」

(広報委員長 松崎)

科目等履修生

<2005年度 イブニング・コース開講科目(19:00~20:30)>

科目名	担当教員	単位数	開講期	開講日
文学1・2	若月 忠信	2・2	前期・後期	月曜日
ライブ・イシューズ	Matthew Miller	4	通年	火曜日
新約ギリシア語入門1・2	山田 耕太	2・2	前期・後期	
初等英語教育:理論と実践	外山 節子	2	前期	木曜日
コリア語中級1・2	金 世朗	2・2	前期・後期	
日本語教育入門1・2	有田 佳代子	2・2	前期・後期	金曜日
組織神学1・2	延原 時行	2・2	前期・後期	
イタリア語中級1・2	Mario Perversi	2・2	前期・後期	

※「初等英語教育」は、新潟駅前前の教室での開講となります。

科目等履修生制度とは、敬和学園大学の授業を、社会人や主婦の方などにも、幅広く学んでいただけるように設けられた制度です。ご自分の興味のある、学びたい科目を選択し、受講することができます。

学生向けに開講しているほとんどの科目を社会人の方にも開放しています。仕事をもちの方も受講しやすいように、午後七時から開講している科目や新潟駅前の教室での科目(左表)も用意しています。みなさまふるってご参加ください。

二〇〇五年度 科目等履修生、研究生のご案内

また、本学教員の下で希望するテーマについての研究を深くすすめる研究生制度もごさいます。大学院進学へのステップとしての利用も歓迎しております。

いづれもお問合せ、お申込みは、
敬和学園大学教務課教務係まで

TEL 〇二五四—二六一—二五二四

e-mail kyounu@keiwa-c.ac.jp

●科目等履修生の募集

対象 高等学校以上を卒業した方、
またはこれと同等以上の学力
があると認められる方

授業料 一単位につき、一万円

出願期間 (前期) 四月十一日～二十五日
(後期) 九月二十六日～十月十一日

※受講できる科目等につきましては、
お問い合わせください。

●研究生の募集

対象 大学を卒業した方、またはこれと同等以上の学力があると認められる方

検定料 一万円

入学金 六万円(本学卒業生は三万円)

研修料 半期六万円

出願期間 (前期) 三月三十一日まで
(後期) 九月九日まで

寄付者ご芳名

一般 河上 正義

三浦 修

佐々木 史江

鷹澤 昭一

鷹澤 信子

新潟YWCA

日本基督教団東中通教会

日本基督教団見附教会

日本基督教団新潟信濃町教会

日本基督教団佐倉教会

敬和学園大学後援会

オレンジ会

新井 明 3

一九九一組 新田 和子

一九九二組 今井 正仁

一九九三組 長谷川 義水

一九九四組 丸山 仁史

一九九五組 内山 健司

一九九六組 田中 正範



本学にお寄せくださった皆さまのご支援・ご厚意に心より感謝申し上げます。

まちの駅

「新発田プロジェクト」発表会

—「まちの駅」で感謝を込めて—

新発田のまちを再発見

国際文化学科三年

坂田 和憲



昨年秋、新発田市の商店街の中心に生まれた「まちの駅」は新発田の人々が気軽に交流できるスペースです。本学の学生や教員の存在を新発田の人々により身近に感じてもらったために、ここでの活動については本学も全面的に協力しています。

二月八日と一〇日の二晩、ここで本学学生による「新発田プロジェクト」の発表が行われました。このプロジェクトは、本学教員で新発田市在住のマーク・フランク先生の発案で、大学の英語の授業の中で、学生がグループ毎に新発田の歴史や文化、経済などのテーマを担当し、調べ、それを和文と英文の両方でエッセイにするというものです。学生たちはただ書物や資料を利用して調べるだけでなく、そのテーマに通じている地元の人やそれに関わる職業に携わっている人などに直接インタビューして、地元の人々と交流しながら勉強し、その成果を感謝を込めて発表しました。

私のチームは新発田の経済をテーマに考察しました。経済を調べるにあたっては、市島酒造様と村安商店様にインタビューをさせていただき、酒造、そしてかつて新発田の経済の主流を担っていた古着にテーマを絞ることにしました。経済とは、まちの歩みが深く反映されているので、新発田を知る上で大変重要なポイントを担っていると思います。

発表会には、市島酒造様と村安商店様の両会長様やお客様などたくさんの方にお越しいただきました。つたない発表であったと思いますが、みなさまに最後までお聴きいただき大変感謝しております。

「新発田プロジェクト」に参加して、いままでも知らなかったたくさんの方と再発見することができ、感銘を覚えました。何かを始めるためには、まず時代の変遷を知ることが重要です。新発田に関わっていく上で今回のプロジェクトはとても有意義なものでした。

調査結果を地元へ還元



「新発田プロジェクト」の発表で使用した小冊子は、本学ホームページでご覧いただけます。
<http://www.keiwa-c.ac.jp>

学事予告

◆四月◆

- 一日 学年始め
- 四日 入学式

保護者ガイダンス
後援会総会

- 五日 一年外国語ガイダンス
- 六日 二・三年ガイダンス

- 七日 一年ガイダンス
- 八日 履修相談日

- 九日 前期講義開始
- 十日 履修登録期間（十五日まで）

- 十一日 学費前納入最終日（二十四年）
- 十二日 履修登録票提出期間（十九日まで）

- 十三日 一年生オリエンテーション（二十二日まで）
- 十四日 履修登録確認期間（五月六日まで）

- 十五日 休業（創立記念日の振替）
- 十六日 スポーツ大会

- 十七日 オープン・キャンパス①
- 十八日 創立記念日

- 十九日
- 二十日

- 二十一日
- 二十二日

- 二十三日
- 二十四日

- 二十五日
- 二十六日

- 二十七日
- 二十八日

- 二十九日
- 三十日

キャンパス日誌

1月

- 4日 仕事始め
一般入試（A日程）出願（～18日）
一般入試（B日程）、外国人留学生入試（1次）、
編入学試験（2次）、社会人入試（2次）出願
（～21日）
一般入試（センター試験利用入試・1次）出願
（～25日）
- 5日 教授会
- 6日 講義再開
- 7日 チャペル・アッセンブリー・アワー②
説教 金山愛子 助教授
「鏡におぼろに映ったもの」
講演 新潟大学名誉教授・良寛研究所 加藤僊一 所長
「良寛の心～今こそ教育に生かす時～」（写真）
- 8日 大学オープン・カレッジ②（～9日）
講師 明治大学 森洋子 教授（写真）
「西洋絵画史における子ども像
～親の目、時代の目を読む～」
- 13日 卒業論文提出締切日
- 14日 チャペル・アッセンブリー・アワー③
説教 新井 明 学長 「門の外で」
- 15日 大学入試センター試験（～16日）
- 19日 補講日（～21日）
国際交流委員会主催留学生交流餅つき大会
- 23日 一般入試（A日程）
- 25日 後期末試験（～2月5日）
- 26日 教授会
- 27日 一般入試（A日程）合格発表
理事会
- 29日 一般入試（B日程）、外国人留学生入試（1次）、
編入学試験（2次）
横越町オープン・カレッジ
「横越町読み聞かせの会研修」①
講師 桑原ヒサ子 教授
「アルプスの少女ハイジ」



2月

- 1日 辞令交付
- 2日 教授会

- 4日 一般入試（B日程）、外国人留学生入試（1次）、
編入学試験（2次）合格発表
英語英米文学科 卒業論文発表会
- 5日 横越町オープン・カレッジ②
講師 杉村使乃 専任講師
「不思議の国のアリス」
- 7日 春期休暇（～3月31日）
後期集中講義（～9日）
- 8日 「新発田プロジェクト」発表会①（まちの駅）
- 10日 「新発田プロジェクト」発表会②（まちの駅）
- 12日 横越町オープン・カレッジ③
講師 金山愛子 助教授 「赤ずきん」
- 14日 一般入試（C日程）、外国人留学生入試（2次）、
編入学試験（3次）社会人入試（3次）出願
（～3月10日）
一般入試（センター利用入試・2次）出願
（～3月1日）
- 18日 学内合同企業説明会（49社参加）
- 23日 教授会
- 24日 KIVサークル 国際ボランティア
出発（～3月6日）（写真）



3月

- 1日 図書館蔵書点検（閉館）（～23日）
- 2日 再試験
一般入試（センター利用入試・3次）出願
（～3月23日）
- 9日 教授会
- 10日 一般入試（センター利用入試・2次）合格発表
- 15日 一般入試（C日程）、外国人留学生入試（2次）
敬和学園大学と長栄大学との
学術交流協定調印式（写真）
- 17日 一般入試（C日程）、外国人
留学生入試（2次）合格発表
- 18日 第11回卒業式（聖籠町町民会館）
卒業謝恩会（ホテル新潟、写真）
- 24日 理事会
- 26日 一般入試（センター利用入試・3次）合格発表
- 31日 学年終わり



